

## 2010 年度・研究旅行奨励制度 【個人旅行】

名 前	永田香織	研究テーマ	韓国の伝統文化に触れ、異文化理解を深める
目的地	国 名	地域・都市名	
	韓 国	ソウル市、龍仁市、慶州市、安東市	

<b>研究旅行の目的</b>
<p>日本の歴史と文化は、韓国と深い関わりを持っており、日本と韓国は文化のツールも共有している。そのような両国の相関関係を証する文物を、博物館や歴史的史跡を巡りながら探る。日韓の文化には、食文化や礼儀作法、生活様式などにおいて様々な異質性があるが、今回は、中でも今日の礼儀と道徳に溢れた韓国の文化のルーツを、李氏朝鮮時代の韓国の文化に求め、そこに息づく人々の生活や思想をつかむことで、異文化理解を深めたい。</p>
<b>期待される成果</b>
<p>異文化を知ることは自文化を知ることである。韓国の伝統文化を調べることで、日本の文化のルーツや古代の韓国と日本の関係性を知ることができ、また、韓国は中国から日本に文化が伝えられる際に大きな影響を及ぼしていると考えられるため、日韓の関係性だけでなく、中国と韓国の関係、中国と日本の関係をも探ることができ、日・中・韓の文化の伝播の歴史について理解を深めることができる。</p>

<b>旅行行程表</b>		
旅行期間：2010年8月18日 ～ 8月25日 [8日間]		
	<b>滞在地</b>	<b>目的</b>
第1日目 8月19日	ソウル市 ・国立古宮博物館 ・景福宮、 ・国立民族博物館	世界遺産でもある朝鮮王朝最初の宮殿を訪れ、宮殿建築美や王朝文化に触れた。また、先代から現代にいたるまでの韓国の人々の生活の移り変わりを感じながら、韓国の民俗、風習を調査した。
第2日目 8月20日	ソウル市 ・昌徳宮(ガイド付き) ・北村李家 (伝統文化体験コース)	朝鮮王朝の思想を反映し、李氏朝鮮時代の趣や生活様式を色濃く残している昌徳宮から、当時の文化を調査した。また、朝鮮時代から政治・文化・行政の中心地であり、古今の風景が共存するこの町で、韓国の伝統、文化を学んだ。宮廷の礼儀作法などを体験。
第3日目 8月21日	龍仁市 ・韓国民俗村 ・民俗村博物館	韓国の伝統文化を保存する形でつくられたこの村の、各地方農家、両班邸宅、鍛冶屋、書院などの生活様式や、韓国古来の伝統芸能に触れることができた。
第4日目 8月22日	慶州市 ・慶州国立博物館	新羅千年の歴史を持つ遺物が残っている、国立慶州博物館からは、時代とともに変わっていく文化の様子を調査した。
第5日目 8月23日	安東市 ・安東河回村	現在でも両班の子孫が住んでいて、韓国の中の韓国と称される韓国古来の伝統文化が息づく地域を訪れるこ

		とで、現代の文化のルーツを探ることができた。
第6日目 8月24日	(ソウル市) ・昌慶宮 ・景福宮(ガイド付き) ・国立民俗博物館	昌慶宮では、これまで見た宮殿と比較検討を行った。 また、景福宮や博物館を再び訪れることで、さらにその 特色などを理解することができた。

### 【報告書・要旨】

美しく活気に溢れた都市、ソウルの中で、ひときわ目を引き存在観を放つ李氏朝鮮時代の王朝文化が香る宮殿。今回見た景福宮、昌徳宮、昌慶宮の3つの宮殿にはすべて、無駄な装飾や威圧感がなく、その代わりにこれらの宮殿には、秩序と威厳があり、随所から礼儀と道徳を重んじていた李氏朝鮮王朝の価値観が感じられる。

今回の研究旅行では、これらの宮殿の持つ特徴や構造から、当時の文化を考え、また、煌びやかだった500年の歴史と文化が息づく朝鮮王室の文化財に触れることで、そこに暮らしていた人々の生活や思想を捉え、さらに、中国文化が多く伝わったと思われる新羅時代の文化財が数多く残る国立慶州博物館や、韓国精神文化の故郷と言われ、当時の世界観を肌で感じられる安東を訪れ、王朝文化だけではなく民衆の暮らしにも触れることで、当時の韓国の様子を掴み、今日まで絶え間なく受け継がれてきた、礼儀と道徳に溢れた韓国文化のルーツを探り、異文化理解に努めた。



(写真1) 昌徳宮：吉祥の動物像



(写真2) 国立古宮博物館：王妃の衣服

### 【研究旅行報告書】

所狭しと立ち並ぶ高層ビル、変わることない自然の美しさ、古い歴史の香りを伝えるソウルの宮殿。そして、韓国精神文化の故郷であり、昔の趣を今もなおそのままの形で残す安東。このようなすばらしい場所を数多く残す韓国は、伝統とモダンが混在する国である。

今回、研究旅行で様々な場所に行き、韓国の多くの文化財に触れ、宮殿の造りや模様、形、色などの細かな部分から、また、貴重な資料の数々から、李氏朝鮮時代の王権社会の様子やその当時の人々が信仰の対象として崇めていたもの、そこに暮らしていた人々の生活の様子など様々なものを垣間見ることができた。

李氏朝鮮王朝は、礼儀と道徳を重んじることで国の秩序を保ち、質素を美徳としていた。それは宮殿建築にもよく表れていて、華やかではないが、威厳があり、派手な装飾を抑えた美しさは、今回見たす

べての宮殿に見ることができた。さらに宮殿には、そこに暮らした人々の様々な想いがつまっており、韓国人が長い歴史と文化の中で得た知恵が感じられる。また、韓国が儒教を重んじている国であるという認識はあったが、実際に現地に行って調べてみると、こんなにも至る所に儒教的な思想が根付いているのかと驚いた。

儒教の教えに基づいて、陰陽五行にそって造られたものは非常に多く、日常の生活の中や、宮殿で行われる重要な儀式の中にはもちろん、その建物自体、宮殿にもそれは見られる。例えば祭祀を行う時に用意する供え物は、儒教の教えに従い、厳格かつ正確に準備する必要があった。東側には、陽の食べ物を置き、また陽の器に盛り付ける。主に赤い食べ物であるとされ、果物やなつめ、くるみ、肉類などである。これをポンドンペクソという。そして西側には、陰の食べ物を置き、陰の器に盛り付ける。こちらは主に白い食べ物とされ、発酵したものや、塩漬けされたものが置かれる。これをオドンユクソという。そしてその外側にお酒が置かれるのである。これをチュンソサンという。このような儒教に基づいたやり方は、王や貴族によって宮殿などで行われる祭祀においてだけでなく、一般市民が行う祭祀の中でも同じように行われていた。

また、国家と王室の運営に必要な儀式はもちろん、儒教の礼法に従って厳粛に行われた。これは国家の威厳を高め、秩序を維持するためであり、例えば、外国使節の受け入れの際には、賓礼という儀式を行い、その他にも、凶礼という位牌を祀る喪中に行う儀式や、軍礼という武厳、礼節を唱える儀式も儒教の教えに基づき行った。

民衆の生活においても、村を運営していくために守らなければならない約束として、儒教的な礼節にあった規範や規則をもうけていた。さらに、服飾などにも儒教の教えが行き届き、例えばこのころは儒教理念に基づいて家系を重視し、男子継承を基本としていた時代であった為、男の子を産むために多男を意味する装身具を身につけ、王妃の服飾は、仁、義、礼、智、信の五行を兼ね備えたもので、温厚な様子を象徴するものでなければならぬなどとした。**(写真 2)** さらに、柱一つをとっても、陰陽五行で天は丸くて地は四角いと考えられていたため、中の柱は丸みを帯び、外の柱は角ばって造られた。これらのことから、儒教の教えが韓国社会にいかにか浸透し、根付いていたのが伺い知れた。

そして、李氏朝鮮時代と言えば、厳しい身分社会の時代であり、このころからすでに、今の韓国の礼儀や道徳を重んじる精神が培われていたのではないかと考えられる。今回、景福宮や、昌徳宮、昌慶宮などの宮殿を見て、韓国が当時いかに、王中心の世界であったか、その様子が宮殿の造りの細かな部分にまで表れているのが見て分かり、韓国社会の王権政治の徹底さと壮大さを感じた。

宮殿は、王とその家族が暮らす都城でもっとも重要な位置にあるもので、国を統治する政治行政の中心であるため、風水地理学的に最も良いとされる地形、後ろに山があり、前に川があるという背山臨水のもとで造られた。これは村の発生にも言えることであるが、宮殿は、民衆と区別し、王の権威と尊厳を示すために、丹青などで装飾し、家具なども民衆と差をつけるため、螺鈿漆器を使用したり、また、赤い色は王の権力の象徴であったため、宮殿に使用し、一般の家庭では使用を禁じたりした。さらに、王が結婚相手を探している時には、一般市民の結婚を制限することもあったという。このように細部にまで身分によって差をつけていて、このことから、王を中心に身分の秩序が厳しかった李氏朝鮮時代の様子が伺い知れた。

また、景福宮や昌徳宮など、王の居る宮殿のあるところは、その建物はどこよりも高い位置に堂々と構えており、そこから城の入り口の門までは、一直線に伸びた王の通る道、御道があり、その左右に設けられた臣下の通り道である臣道は、御道よりも幾分低く造られていた。こうすることで、王は民衆の様子を見渡すことができ、また民衆も王の姿を拝見することができたのである。さらに、それぞれの身分をはっきりと示し、自覚させ、王の地位を唯一の存在であるということを示めしているようで

ある。いくつかまわった宮殿の中でも、景福宮の勤政殿の正面から入口の門までの一直線にのびた道には少しの狂いもなく、何にもはばかられることなくその門の先のソウルの街まで眺めることができ、その景色はとてすばらしく、格式高い造りであると感じた。昌徳宮においても、宮殿内にある門が、臣下たちが頭を下げねば通れぬように低くなっていたり、オンドルにしても、煙のでる薪を燃やしていた民衆とは違い、あまり煙の出ない炭を使用したりと、王の権威を高めるために様々な工夫がなされていた。これらのことから、韓国の宮殿には、本当に厳格な秩序と美が存在し、礼儀と道徳が感じられた。

さらに、宮殿のような建築物や、そこに暮らしていた人々が纏っていた服、使用していたものなどには、その身分を象徴するものや、それ以外にも縁起ものとして考えられていたものが、模様や絵となり随所に見られた。

李氏朝鮮時代には、王とその世継ぎを守る為、毒がつくと色が変わる銀製品を使用していたのだが、その王室で使用された銀製品の器や匙などの表面には、龍や雲、渦巻きのような縁起のいいとされるものが、繊細な模様で描かれ、格調高い印象を与えている。外に出る時、王や王妃、皇太子、妃、王女が乗っていた輿には縁起ものとして、鶴や蝙蝠などの美しい模様の彫刻が描かれ、王の象徴である赤い色が塗られていた。また、これ以外にも縁起の良いものとして、龍と鶴の子であるといわれる鳳凰が描かれているもの、地位を表すものとして虎の絵や像が使われていたり、昌徳宮にある宮殿の壁には長寿の意味を込めた亀甲の模様を用いてあったり、オンドルの床の下の壁には、砕けた氷のような模様を用いて、火事除けを意味していたりと、飾られている絵や壁の模様にまでひとつひとつ意味が込められていた。

大韓帝国の時代には、韓国の国花であるすももの花も描かれるようになり、家具や軍服、切手などに幅広く使われていたようだ。しかし、新羅千年の歴史を持つ遺物が残っている、国立慶州博物館で見た展示品や、李氏朝鮮時代の宮殿には、蓮の花が多く見られ、時代の変化とともに変わる文化の様子がうかがえた。このころ、大韓帝国の時代から、日本はもちろん中国や西洋のものを取り入れる体制が進み、フランス式の皇室を造り、西洋の近代文物も多く輸入するなど、西洋化も進んだようである。中国の文化を輸入したものと言えば、韓国でも、生きていた時代は、死んだ後もそのまま続くと信じられていたため、土で造った男女の土偶や楽器を演奏する人々の人形を墓と一緒に入れ、埋めていた。これは中国の文化と同様で、最初は人や家畜を本当に埋めていたが、後世になって人形になったのである。

また、今回宮殿を巡ってみて、韓国の宮殿の特徴として、動物の像が至るところにあるということに気がついた。特に、宮殿の中には龍が多く、像や絵が様々な場所で見られた。波打つ様子は力強く、神聖なものと考えられていたため、龍は当事者の象徴であり、つまり龍は王の権力の象徴であると考えられていたのだ。動物の持つ最上の長所をすべて備え、調和能力に優れていると言われる龍は、中央を守る神として、王の居るところには必ずあり、景福宮の勤政殿の天井には2匹の龍の絵が描かれている。さらにここに描かれている龍には特徴があり、通常は4つである爪が、7つも描かれているのだ。これは、王を守る存在として、これ以上ない最高の守り神である、ということを表しているようだ。また、龍は宮殿の火災を防ぐものとしても考えられていたようで、池から躍り出し水を纏う龍の姿から連想し、宮殿の蓮池には銅で造った2匹の龍が沈められていたようである。

しかし、王の寝室である建物の上には、「龍の通り道」を意味する棟というものが、他の建物と違ってなく、これは、龍は確かに王の権力の象徴ではあるが、やはり王の上に立つ、王より偉い存在はないのだと言うことを示しているようだ。ここにも、王に対する礼儀の限りが尽くされているのが感じられた。けれども、そんな王の毎朝一番の仕事は、母親に挨拶に行くことであり、母親には頭が上がらなかったのだという。身分によって様々な違いはあるものの、両親や祖先を大事にする精神は身分に関係なく古くから人々の心に根付いていたようだ。

安東や博物館の資料で見た両班の家には、サダンという祠堂が多く見られたが、そこに先祖の位牌を祭り、毎年ゼサという祭祀を行っていたそうだ。龍仁市の韓国民族村で見た、民衆の生活を綴った資料の中でも、両親が死ぬと、子供はお墓のそばに小屋を建て、三年間生前のように毎日食事をとり、慟哭しながら故人の冥福を祈り、祖先を追慕していたという記述が見られた。

そして、韓国の宮殿には、龍以外にも火災や厄除けのために、屋根の軒に土偶のような動物の像も置いている。**(写真1・3)** これらは、建物の格式や規模によって数などは異なるものの、今回見た宮殿の軒にはすべてこの厄除けの像があった。これは吉祥の動物像であり、この屋根の軒に人形を置くという形式は、中国のポという国の王が創り出したものであり、高麗時代に韓国に伝わった文化であるようだ。これらの像は、西遊記の登場人物をモチーフにした像であるといい、これは日本の建造物には見ることが出来ないおもしろい特徴である。また、こうした細かなところにまで、中国の文化が影響しているのだということが分かり、やはり日本と同じように、様々なところで韓国も文化のルーツが中国にあるのだということが感じられた。

他にも厄除けの為に造られたと思われる動物の像は至るところにあり、主なものは、朱雀、青龍、玄武、白虎であり、南には朱雀、北には玄武、東には青龍、西には白虎の像が置かれていて、数百年もの間、黙々と宮殿を守っている。これらの動物たちは、どこから厄が来ても払えるようにと、ひとつとして同じ方向を向いているものではなく、正確に向きが定められているのだというから、その徹底さに驚いた。

これらのことから、当時の、この皇帝国家が整えられた李氏朝鮮時代に生きた韓国人は、王に対して、また、祖先や両親などの目上のものに対して、ありとあらゆる方法で敬意を表し、礼儀を尽くしており、現代の韓国の礼儀や道徳を重んじる精神のルーツが感じられる。当時の人々にとって身分社会に生きることは、辛く苦しいことであったのだろうが、王を頂点として、厳格な上下関係が築かれていたこのような時代があったからこそ、祖先や両親を大切にし、礼儀や道徳を重んじる文化が、長い歴史を経ても変わらずに受け継がれ、今日を生きる韓国の人々の精神にいまだに根付いているのではないだろうか。今回の研究旅行で私は、宮殿や様々な資料を見て、実際に多くの韓国人の方と交流することで、韓国人の礼儀や道徳を重んじる精神をととても感じた。

また、中国から伝来した文化を、建築物や資料の至る所に見ることができ、やはり韓国の文化も、日本と同様に中国に由来するものが多いということを改めて感じた。その中でも今回、中国から韓国に伝わった文化のひとつとして、屋根の軒にある吉祥の動物像のことを書いたが、これらは、日本の大阪城のシャチホコや沖縄のシーサーと似てはいるが少し様子の違うもので、日本の建築物には見られないものであり、とても興味を持った。他にも中国から韓国に伝わった文化で、日本にはないものが見られたので、それらの文化がなぜ日本には伝わらなかったのかなども、今後調べてみたいと思った。



(写真3) 国立古宮博物館：吉祥の動物像



(写真4) 安東市、河回村：瓦葺きや藁葺きの韓屋



(写真5) 龍仁市、韓国民俗村：韓国伝統結婚式